

讀老日記

全

特別  
14  
696  
33





特  
14  
696  
33



讀老日札目錄

三十六哥仙	王黉南	金蘭齋詩世
西依成舟	折籠	舊家
吳祥瑞	杉木望一	春畫
歟耳爐	淺草文庫	清圓花
朝鮮國王求書	業年角織	富書
板屋萱庭	寺社奉行	船の手水鉢
吉田善好庵	山口素堂	指頭畫
世の中百首	芭蕉行脚	寺坂吉原山
行脚宗興	細井廣澤楓	柏原捨女

小寺燈  
玉足文庫





太田道灌墓 李梅溪小傳 十二天

山吹のふ 向井玄来 荒木由守武美社墓

長山曾子 圖書集成 祖徠初治石

西室初小傳 小西米山の舊菴 鳥羽繪

上島鬼母墓 瓦石動 羊野庵初之墓

涼菘小傳 平秋東伝小傳 意川春所

朱樂菴江 唐衣橋洲 儒文

梅初心因墓 池田言水墓 角力繪馬

霞園通手鐘銘 河保寿小傳 山鹿系行子

夜叉神石像 僧南谷松世 僧比山

高陽山人 江列の土 僧日可

唱首望 櫻隱の跡 南郭初画石

息游軒墓 青木文蔵墓 丹山淳時

市場通文 藤門同弁 玉虫墳

将野探幽妻墓 暖生康 おろん

芥川三郎章 阿林 増田衛川墓

王守岸字 山縣大貳 伊三庭可丈

葛唐丸 三圓筆海空墓 祖賤禪師雪佛石

川邑瑞軒初生 秋色櫻の舞



讀老菴日札

三十六哥仙

勢別山田久保町一志正任大夫の家は英一蝶著色  
 の三十六哥仙の色紙は十八枚は多賀潮湖の歌字は  
 又十八枚は英一蝶の歌字は此三十六哥仙は一蝶  
 流泉のうきをとりて十八枚と写し歸島前  
 濤のなる宮の御師一山任大夫とて所より  
 歸の十八枚の故は追ひ後江戸に歸り寫し所せ  
 るる余甲戌復伊勢の海を自撃するといふ也  
 英一蝶と稱する幸の島以後の幸の島へ

江戸著書集

馬文耕所多賀潮湖英一蝶といふ





多し流しに後をさへて武ありといふ弟の妹は  
りーとらるる乎と射故也の母事とては是より  
莫一塔と改やといふ

王韃南

王韃南ハ明末の人也昔邦を投外して南都を  
今世に以て孫の弟都衣都大明屋嘉慶の  
町家也其甲戌春京師を浪遊し終るまで訪ふ

金蘭齋辞世

東山の電人といひ書を加ふるに西山の月人といひ  
申すかきことごとく不承といふもいふも  
金蘭齋ハ其弟妹四作并為之腐鴨三行也

知りて京師に在りて遂に京に教授り先生名忠  
号蘭耕又福庵 金武ハ母方ノ族ナリ

西依成齋

西依成齋ハ川人其者あり花樹遊む海も荒  
志ハハ兩親に度々異見を如へりも更ハ父を諫方  
於此成齋の親に於て先生のい  
吾異見致してし武日後門人其りハ先生の  
其依ハ志リて花樹いり於て其り以後ハ其  
世用多しといふハ門人の先生の異見を西自  
然に其りて先生のいへ先全報を昔のいへ  
才一身の養生を其り其り不傷を其り其り



才者今之季より二年の月... 其甚なりといひて  
大炊大夫ありて語りしは門人のいふことなり先生も  
為筆といふ月より其後其本より形もいふ先生の  
いふこと不傳の爲筆其本といふことなり

折籠

今世都下の俗婦人好娠一たりといふ折籠といふ  
ことありて其の字其の字なり

古事記

上卷 称徳天皇道鏡之陰猶不足被

思食以暮暮顔作陰形令用之給之間折籠  
仍腫塞及大夏之時は平尾如嬰兒手其手奉  
見云帝病可愈平塗油欲取之爰右中平百

川美狐也云抜剣切尾肩云々仍毎療帝崩

舊家

三井建章の勢別丹生人因て丹郎といふ世々  
刀圭を以て業久又旁り繪筆といふこと此建章  
の家は建久年中の普請なり今世の家他は  
大に異なり因て此郷を舊家の地形をいふ  
水もなる京師浪花のありたり普請する所の  
必此家の土一掘り求む其地形の土月以て  
めんが... 其家の土一掘り求む其地形の土月以て  
其家の土一掘り求む其地形の土月以て

吳祥瑞



吳祥瑞の号ハ勢別松坂の号也十八丁海  
大口邑ト云々今ヨリ子孫々伊能ト云々一氏家也  
又勢別山田西世古方エロニノ榜丁ナ  
御師朝田彦大夫ハ吳祥瑞の檀家ナリ祥瑞唐  
山ト在リテ今ヨリ用四經リ一板ヲ造リ  
大神宮ヨリ奉ルヤ如ク毎歳来船托リ長條  
至ヤ夫々朝田彦大夫の家ニカケテ今世其留カ  
余甲戌其勢別の御高月又其形左ニ記

杉木望一

杉木望一ハ勢別山田の人御師ト云々望一臨終の  
遺書ト云々山田ト云々中村忠実家ニ藏ル余甲戌  
勢別の御其遺書ヲ觀ル其筆の運の中  
盲人の書信ト云々如ク又小俣栗森君の家短冊  
一葉も其運筆盲人の手蹟ト云々更ニ見ユ  
余考ルル古板七部集リト云々七人望一ト云々又新板  
本ノ七部集ト云々盲人望一ト云々是書信の謬  
誤ト云々カニ云リ

春畫

今世玩弄の所ハ春画ト云々何の時代ト云々



權輿 漢書 陳平傳日望西  
屋為男女裸交接置酒誦諸父姊妹飲令仰祝  
馬 漢書 春書西交 權輿 未考

歟耳爐

吾邦の俗歟耳爐 吾邦の俗 耳爐 吾邦の俗 耳爐 吾邦の俗 耳爐 吾邦の俗 耳爐

歸田集

高濂 有宜銅歟耳爐之詩 註曰

鐫款大明宣德年製六字作三行

當時命學士沈度指書

解云沈度字民則門太宗之時人

淺草文庫

淺草文庫ハ堀田如賀守正盛の集、所也正盛ハ美濃大垣人備前守喜多家の家老堀田勘右衛門の子也雅名留之助春日居の甥也

大猷公ハ御扈從ハ星江上以所御意ハ惚ト從四位、任ス

又淺草文庫ハ醫師板坂下齊の集ハ所ハ事蹟今考の語也淺草文庫の碑淺草寺ハ院也

清圓尼

清圓禪尼大石重雄の女也名多良也男文女文至稅僧祖鍊於榮清圓尼四人也母ハ石集源若衛



の女也此清圓良雄没后厄と云々京師と性々小  
瑞家と云々授けしと云々平生讚歌の金昆羅と  
信心しと云々廿歳の年と云々月参と云々百余歳迄  
一月も懈るな天期二年六月七日百十三歳に  
没と云々京師終焉地大徳寺孤蓮庵と云々葬法歸  
心月清圓禪尼と云々

朝鮮国王求畫

海北及松龍と画し朝鮮国王より奉せし事  
あり王より臣朴大根命し書翰を以て  
友香よりししと云々画を求むしと云々此年八度長  
十三年也

業平用紙

今世都下の俗態治病と云々業平也と傳ふ  
事あり志あり性音用紙人の名業平と稱す  
とのみ余作の事と詠し道曾大鏡と用しと云  
證據も古人の物と云々在りし事杜撰なり  
業平の事大鏡 弟百五十九代字女弟と云々  
先考の系は此の事と云々此の事と云々  
と云々此の事と云々貞觀八年丙戌昔月五日生れ  
元也八年甲辰四月十日如らししもの事と云々  
此歳十九日と云々此の事と云々此の事と云々  
此の時節と云々此の事と云々此の事と云々



すまひてをまひて海をふか石よりさるらふらふ  
らんおれらるるおれらるる

### 富田書

香山瑞庵の河内國守家邑の又若ハ彰字元章  
文内瑞庵志系京師より教授此家書籍  
富田書とて斯くはふれし五威三郡田坂の書  
京師浪花の書曾彼河内守到り何れ書くも  
彼の家も持てぬれはるる贖ひしより因り重複乃  
書も夥し因り家人等此書と先主告り先生  
の云々書曾の遠方より持来るとの贖ひされハ亦  
持来ると申すは持来られハ奇書と獲る事也

あはれおの諸りてそそ人を悲愴せし

### 板屋萱屋

土州昔河郡其基山の麓一々村長念々板屋  
萱の底はるる性昔村は夢窓圓師の住り  
板屋萱屋を他よりめりて今此一村が  
おとて圓師の和名

板の屋は萱の底をて地をてかてぬ村時由

### 寺社奉行

林永喜の村道春の昆布好り度長十七年  
台徳公御代召出り八百草石あり法師の住り  
寺社奉行は任り寛永十五年永喜病死す好り



予の... 家新絶... 将評... 安...  
右京進重長松平... 勝隆...  
御... 諸侯の役...

船の手水鉢

浅草舟形... 本堂の前...

江戸... 江戸... 舟の書...

延平... 初... 此項... 支藤田

金藏... 彼... 其長...

二間... 舟の形... 何の年

池... 其形... 唯

石の櫃... 故人... 舟... 舟...

本堂... 舟... 舟...

吉田兼好の舟書

出生... 舟... 舟...

吉田與禪山下野僧

一七... 舟...

山口素堂

山口素堂... 舟... 舟...

勢州山田高日山常明舟本堂  
の天井... 舟... 舟...

天井... 舟... 舟...



詩及び文ハ本色中ニ依詠ハ其緒餘ナリ  
 曹師ハ隱迹トシテ其師ノ陰ヲ稱シテ稱太兵衛諱ハ  
 信章素堂ハ其号アリ又素堂トモ号シテ寛永  
 十九年正月四日生テ享保元年八月十五日没シ  
 谷中感應寺中瑞書院ヲ葬シ法歸廣山院  
 殊巖素堂居士トシテ又碑川指谷街巖淨院  
 山口素堂ノ墓トシテ是ハ素堂ノ甥山口黒露  
 ト云者年回ノ宗建テ所也

指頭畫

昔邦ヨリ指頭画トシテ其トシテ池大雅及ヒ黒川  
 皐五ノトシテ是トモトモ又翠画トシテ國朝画徵録姚

采能畫以及指頭ハ尺西河合集陶簞指頭  
 引皆以指頭行々人日指頭画ハ吳の南章ヤ  
 云人ト權輿シ

世の中百首

伊勢荒木田守武世の本百首ハ和歌板中ニ又寫本  
 有ル寫本ハ勢別字活藤系長即チ一子詩ト  
 書寫シテ施テ其跋ニ其トモ延富八年八月廿八  
 子卷の内藤原本トシテ七十二歳記リト書キテ

芭蕉前勢別行脚の砌ニ仙眞行々立ノハ何本の  
 花もあけぬぬの山田館丁三羽館半左衛門



象とくらの事、於此今此身仙詠草ハ川山寄早  
 野村大以兵衛家も何れ余甲戌復勢遊ハ  
 御物村我々、拜覽も尤哥仙真行連元ハ先也  
 ○益光○又云○奈菴○勝延○清里○正永  
 ○柳書好子又芭蕉柳書勢別行脚の所ハ松葉屋  
 風瀑と云者の家ハ館と云伊賀、此者浪花ハ  
 旅寝も又勝延も亦羊大夫同伴も、浪花ハ  
 行脚也といふ

寺坂吉右衛門墓

寺坂吉右衛門信行ハ播磨赤穂浅野家ハ輕率ハ也  
 大石貞雄至君復讐の節赤穂ハ使ハ后歸來下

自又世人の事

節巖ハ自信士之墓

谷右寺坂信行

墓ハ向ヒ左リ、延享  
 四丁年十月六日卒ト  
 あり傍ハ碑あり

蕭堂知秋信

寺坂信行妻

近世内田叔明ハ  
 蕭寺坂我ハ終始を  
 記シて碑を樹シ寺  
 坂信行逸史碑ト云

日東山曹溪寺

濟家敏心寺末  
 三田古川早  
 ゼツコウト云

延享二年九月二十日



行脚宗興

信真(成瀬)の石碑を以て脚藩原宗興  
あり一首の和歌を多しきり此宗興といふ人の  
圓の人の名を知らずなりとあり身作をぬき  
りまらうといふ松平は一葉の能母を里人の  
たかきとすやまねはうらみはたかきとあり  
志れしの名をたかきとす和歌を多しきり  
子の話あり

とくも身の旅路よもえん志心寛の  
浦のありしをいひたりとあり

細井廣澤翁佩刀

細井廣澤翁佩刀赤心鞆圍の四字とあり  
又長一丈八寸島田吉久作あり

頭四分一  
天龍 目貫又二キ 縁五春大吉  
四字隸字  
鞘采由食 鐔隸ノスカシ 柄糸花色

此四字ハ出羽ノ大塚ト云  
との彫刻

柏原捨女

柏原捨女の丹波に柏原の人也從部と北村を奉る



門下者少後播別いりて細平の不徹菴に在り  
盤珪禪師も參得雜髮の時も自出聲とて今  
招承の基もあす

秋風吹くや柳心ぬきくもわらわりのみ

青道灌墓

相州秋山洞昌院境内に在り伊勢系とて二十余其  
墓の形古輪の如し法号とて前も名をたす  
洞昌院殿大圓道灌大居士とあり

李梅溪小傳

李梅溪名衡正字全直又潜齋と号り又江西  
云号り考と一恐と云字真榮朝鮮國慶尚道

美山人文祿年中ノ役ニ楚囚ト好まらるる事邦南紀  
もたると時ニ年ヲ終ニ歳也衡正と紀別ニ生衡正  
縹を以て本藩に侍り今世紀藩・李利平ニ中  
いり者いひ孫とて衡正或年五余と奉り

徳川創業記に據り

衡正の合名とて李五身と云字騰徳とて以て  
本藩に侍り又曰李徳源ハ梅溪の男也名澄字徳  
源号清軒又一陽齋儒とて以て本藩に侍り

十二天

備中園浅口郡日林邑美山寺宝物十二天の板行  
り厚サ三寸余長サ四尺余數只板両面あり



往古弘法大師入唐の節抄集を所とて古口林邑ハ  
池田春之助採り領地あり

### 山吹の哥

太田道灌頼朝の少時達ありて西の事ありし時  
四家より中義堂を乞ひしに二八をその女の山吹  
の花一枝を折り道灌より乞ひしに年世の  
人の知れぬあり余のしるはれぬを折れぬ  
うの折ぬ後拾遺集十九雑少名の家より折  
あはれぬのぬりし日又のぬり人の折れぬかぬ  
枝折れぬとせしむる折れぬあはれぬを折れぬ  
又の目も折れぬとせしむる折れぬを折れぬ

竹のしるはれぬのしるはれぬのしるはれぬ

折れぬ八重のしるはれぬのしるはれぬのしるはれぬ

### 向井左馬

向井左馬は向井元昇の子なり先帝四人ハ  
女ありし子なりと云他領と云ふ者熱領と云ふ者  
震軒二男元成号尊所一人左馬也右元淵  
号落橋合稱年一節系部終る者なり直如  
皇の側より今甲以奉る事御もたの其墳  
墓と掃

### 荒木田武守夫妻墓

身衣美社ハ勢別字活字の室曆字子智金書堂



若良珠玑号山麓と云う人建之する所也又其武  
の墓ハ山麓の山在其形と輪形と余甲戌集誓  
遊の如拜掃身去ハ文十八年八月八日卒  
辞世和名云々  
朝政身云々

長山雪子  
長山雪子ハ氷雪の家ト長山七年の娘也和名又

辞工のり後師足共其の妻と云ふ山徒三年  
七月廿四日卒と云ふ城北白山大寺に葬り法歸  
妙珠院月頭日令

圖書集成

圖書集成一萬卷寶曆十年清人汪繩武  
者持多肥之長崎と著岸と

但徠公翁法名

但徠刺始名景元雅名傳二所居子雙松字と  
茂卿云景保十三年正月九日卒之田寺所長松系  
法歸

清海院根峯知尊居士



西雀翁小傳

西雀ハ井原氏松壽軒と号す浪丸鎗屋所住者と  
能譜梅沢宗茂もあつて出藍の誉あり自ら  
難波松林と稱す元禄六癸酉三月八日没す  
行年五十二齡大坂八町目新野屋本陣法橋  
仙皓西雀居士と云辭世の吟あり

入り五十年のころ浪丸流と云  
おのれのあまたの歌あり

浮世の舟人なりとありて二年

余甲戌夏浪花漫遊して彼寺に到り翁乃  
墳墓を辨拂し

小西来山の舊菴

撰別今宮村の今よ其の孫も来山泉別院  
の産所の石撰別船場も其の寺も其の  
宮り別所なり其草を十萬堂と云

十萬堂

呪ふ

額ハ黄檗脱山和尙の指すあり  
余甲戌夏浪遊して其の  
舊菴を訪ふ

鳥羽繪

鳥羽僧正猷實ハ宇治大納言隆圓の子なり



知少くも丹毒を好むを 心狂者も巧也今世鳥羽  
繪を稱するも此人を以て鼻祖と云

上島鬼母貝墓

浪速伊丹寺河原屋深草寺に在り

此寺院京師深草の里に有道元禪師の舊地也此  
寺荒廢より伊丹の住如樂共其の者今の地は  
再建より其名荒木氏の菩提行より如樂共其居三島  
氏より更に此よりして鬼母貝の墓に此寺より有

鬼母貝の上島氏 俗稱共其衛自善菴と号す人  
數ありあ、權花初傳兄馬樂童囉々哩  
元文三年八月二日没法號  
仙林則翁居士

瓦不動

江戸本庄三圍山延命寺境内あり此像正保四年  
九月高野山僧威立法印の行をもちて伴夫  
と云ふ人作り行ありと云妙ありと

半時菴浪々墓

浪花難波橋瑞壽寺あり塚に石二ツ樹一ツ成桂  
流るる流に波を以て鳴る 京師六波羅より  
寓居する 羅人等其の其人也  
波に羅人の擲する 貞徳の流を海に決つる后を  
浪花の流にして 生涯京の水を飲敢る 浪花の水を  
不飲其驕侈は身をもち 知る處し 浪花江戸端



五丁目は住居より其后左海に移り又浪花に遷り  
心毎格節歸河木村我の産敷より病を那  
終り又寶曆十一年十二月二日没し行年八十八歳歸  
百川長水と云辭世のふり

朝霜や枝をささぎて不この山

此の存生の時我辭世たるをささぎて  
果して霜月二日終り

### 凉菟小傳

凉菟翁は勢州山田の祠官なり山田長右正致權七  
と稱し神風雜と号し如團支齊と号し依後と  
芭蕉翁より号し後四方行脚し江加の別を琵琶

湖より鬢鬘と稱し鏡山と号し雄鬘と号し  
此時のふあり未と号し享保二年四月廿八日没し行  
年七十九歳田村と号し余甲戌年勢陽は漫  
遊し此翁の墓を弟より今其墓碑は  
依其墓所をそのひぬ鳴呼鞠息と云ふ

辭世 合点 其のつみは子規

### 年秩東作翁小傳

東作翁は氏之三松名嘉穂字東作東蒙山人  
号と俗稱稻尾金屋の稱し四谷内藤



新編日傳抄... 煙草を以て業と云ふ者曲也  
以て人少く寛政元年三月八日没と法名  
釋宗尊信士と云  
市谷二丁目各  
善慶寺に葬

龜川春所

龜川春所市姓海倉格長右格字壽平  
狂名酒上不丹と云  
松平丹右侯の足鐵の釋史  
と著述と又夷曲と云  
没は行年四十六谷新編北裏海邊と葬法名  
寂靜院麴谷湛水居士  
辭世詩と和名と  
生厓苦樂四十六年 師今晚却浩然歸天

朱樂萱江

朱樂萱江八山号也右景母貫字道甫淮南堂  
と号と通稱柳外と東都幕府先鋒傳騎  
と大文保在母と始先漢字と和号内山  
淳時と号と後夷曲と号と和号と元文  
年十月廿四日生元寛政庚申年十一月と没  
没と青山又保所書原禪寺に葬と法歸  
運光院養安道又居士  
辭世の詠は人の初と此と秘電と云

唐衣橋洲

唐衣橋洲ハ小島也右恭從字温之醉在庵



長江の後を誦之と更ニ小石川ノ寓居ヲ裏曲ト  
以テ一時ノ時ヲ實保ス矣云十二月四日生ニ享和  
壬戌年七月十八日ニ没ス城西赤坂海土寺葬  
法号

心眼院開卷得聞居士

倭文

倭文ハ口是吾橋ヲ坊住ノ勢屋ノ平左ノの如也也初メ加茂  
真淵ノ從游シ業ト受ク尤モ和言及以テ文稱ス之也宝曆年  
七月十八日没ス行年五深川本誓年五葬ス許世ノ誦ス  
比登乃兵ノ古筑ノ太都ノ古登乃ノ奈加理ノ世波ノ  
改里乃比登播毛子羅文也安羅摩思

梅翁宗因墓

浪花天満西寺所ノ西福寺ノ在リ宗因ノ延一字  
申ノ人也將テ探ル由ヲ娘ト娶リ享和ノ天和二年  
二月廿八日卒ス余甲戌春浪花ノ漫遊シ拜掃ス

池田言水墓

京都誠心院境内ノ紫式部軒端ノ梅ノ  
傍ニあり

角力僧馬

武州川岸石觀ノ音ノ堂ノ中ニ掲ク阿蘇藏相  
右川老ノ権ノ大ノ角ノ越ノ圖ノあり也僧ノ也也  
古雅なり又此境内ノ角力ノ水鉢ノあり也







山鹿素行名高祐甚立在馬の初之江は寓  
兵學を以て都下へ往り万治三年十月三日聖教要  
録を奉りて川へ配流し居故も遇り都下へ  
歸り下谷車故に兵學を教授し貞享三年九月  
廿六日没り牛込榎所宗参年一草り法号

月海院珊光淨珊居士

夜叉神石像

八 渋谷長谷寺境内に在る丈六又余何の爲り  
彫刻し事と知れり其供廣海舟の庭中と故也  
此境内に松の娘の宮居り今ハ世人死之塔の願を  
祈る大ニ美驗とて鬼の面赤キ手拭と上り

僧南谷 辞世

僧南谷石川吉里の在り俗姓依本長又  
松平氏と目目考と松平源兵衛のとも雅名を  
勝之元松平氏會津侯の臣也土風ゆりし  
遍思心院義因長老授りて雅髪とて元  
法儀のり叙次揮筆より若く或人許し白  
慶元以来此師の書も但録の書を以てて文  
筆入秘と世余の書ハ野鳴犬吠と云元文元年  
十月十三日没り行年七十四辞世の偈  
陰未則陰晴未則晴若家帰去天朗  
月清夷々子辞世託



僧比山

比山、備後の國の産あり月秀和局の族弟なり  
後古道人と稱せし正徳五年未年雁鳥降の綿光  
菴より遷化し享年八十歳城川字活田系の  
禪定寺に塔の銘ハ清人國中鄭任鑿  
り撰あり余甲戌春の遊しに於て遊し

高陽山人

高陽山人、六朝の人江田所寓居と姓中山名廷  
仲字仲先清泰の稱と世入唯依澤の業といふ  
丹書家を以て自ら晩年ありて五列八還る浪花  
の舟中とて狂氣とて没せり

江州の土

朝鮮人來聘の時破邦の馬と吾邦の秣斗を是  
れはの疲と氣とを以て秣と吾邦とを交せし  
りやれりや彼邦の馬と吾邦の秣斗を交せし  
屋項郡核生村より出るといふなり此時の  
租税を免せり云西村及時居士の語者香伊也出人

僧日可

僧日可、俗姓園田氏讚別丸龜の産雜髪し  
日可と云宣翁とあり又竹庵妙光菴の号あり  
草山元政上人の族弟なり寛文元年六月廿  
遷化し行年三十八竹菴遺藁一卷世行ハ



和歌及詩。讀合到也元政上人の考訂も所也辭世  
風煙山氷是我家郷 宣離此土別未寂光

唱首望

建部友成の始々京都東福寺に入つ僧と成  
唱首望と稱之後還俗して江信寺より那羅寺に  
活業と云又京都の上より丹書を以て業と云  
後又江信寺還り國學を唱へて老を穿也右理又續  
是と稱も晩年片哥と云とのを唱へ花山院  
右府より片哥道守の四十六字の額をりし

櫻隱の節

伊藤仁外先生列ぶ崇隱とありしは幸か世の

人の形所あり又櫻隱と号すは幸かあり

古學先生和言集

菴六の如く花を櫻と稱し

年を強く花のさきなりし

世の伴といふや那よありて櫻かおのれ家名

南郭翁の画名

玉山集

秋山玉山

余故翁醉墨芭蕉偶為人

取去今不復存余今觀翁之遺画冷小泔

下口不能言欲炎之色蓋亦形多邪矣伸

英因以翁十三歳時所為墨竹一帋贈之其末有

周雪二字蓋知字也其子尺子霄者蓋

既滿于此既今六十余年墨淋漓如形



熊澤り林其  
先小尾澤人

父六野屋三利  
号加藤氏  
仕後致仕  
三京師三寓

息遊軒墓  
熊澤息遊軒の墓下総國古河大堤邑延延寺  
此地は諱居る元禄四年

生小字六以師  
入長三子即右

三河下右伯  
三利病三豆

一利病三豆  
又トモ三豆

三病才近り桐  
原三三三三藤

樹三三三三藤  
良知三三三藤

再備三三三藤  
三三三三石

賜ア則政子  
預ハ後三三藤

去リ和州吉  
野三三三藤

八月十七日没  
余丙子春日光山拜謁帰途先生ノ墓を拜  
掃又墓城の右垣ハ草如足環ゆるとの格造  
す所也今もゆるゆる傍りの翁の遺教のこけり  
やもす

吉木文藏墓

下目黒の世に文化十二年三月十日余カ友念祖  
君と共ニ拜掃墓形左ニハス

遊軒ト号  
晩年明石  
三三三三藤  
古河三三三藤  
七三三

君諱敦書字厚甫源姓  
吉木氏号昆陽元禄十二年  
戊寅九月十日生明和六年  
己丑十月十日終寿七十三歳  
下目黒別野南君爲儒官  
葬地于此故也

右章保二年吉木敦書蒙

命種甘諸國時予曰甘諸先生甘諸流傳使天  
下無識人是不願也今寿塚書石曰甘諸先生

内山淳時

内山淳時傳云補と賀部ト号ト又椿軒ト号ト  
東都幕府の士漢字及以本朝の典故精ト又



和書と云ふは唐衣袴例、和果菅江太田南畝皆  
此人は後遊とて明八年申十月九日没とす  
七軒斎所鳳林寺に葬る

市場通災

通災ハ市場長右寧二字子彦橋帝ハ三仙号  
好し小字ニと稱しはるの存す、通油所住持ハ  
生佳無妻無子古稀あり、猶聖鑑を好む  
稗史を傳ふる宝曆安永の際、若干巻を著述す  
其著る所の稗史史と科、十教誦、海國  
世人教訓の通災と稱し文化九年申年八月  
廿七日没、享年七十四、歿城東浅草税言所

葬る法節

覺法全心

藤門周齋

藤門周齋、若本弘字周齋、歸化東城又榊下  
居士と号す、和刻畫松入和字の爲、凡光雄の号  
周齋和言集、行于世

玉出墳

谷川士清の勢刻、查改人刀圭を以て、紫の及又四期  
の果を種し、和訓栞と著す、其草菅果と題す  
塚とある一夜のこゝろ、瑞芝を生ず、又玉出  
群生とて因り、玉出塚と云



狩野探幽妻墓

探幽妻の墓ハ江ノ高輪大圓寺中ニ在リ余ト共春  
拜掃スル法号

大法院無外自性大禅尼

暖簾

飯田街壺屋の暖簾ハ駒込吉祥寺僧春浦  
和尚の筆也此春浦和尚ハ八百屋於七手跡の師  
あり又日本橋白木屋の暖簾ハ柘榴然ハ先生  
の妻又麻布六本木薬店道明の暖簾ハ  
陶舟趙養の之也  
おころん

世におろん物終云々寫本をばおろん云々土州の  
家士ハ山田春助云々人の伯母あり

芥川彦彦

近世京師の儒家芥川彦彦著者ハ江戸  
の賣人紀伊國屋文左衛門の弟也 **國史** 井太室著  
曰文彦子燭字彦彦早双儒名京師云々  
賞延傳

阿林

阿林ハ山田氏市弥と稱ス尾州の家士山田  
吉之右衛門の孫傳吉の弟也知雅の書を  
しるす **阿林墨帖** 一卷ハ物但徒の跋語を  
載せし文集也



增田衛門墓

武州野火止金鳳山平林寺に在る増田衛門の墓根の城本より切腹と因るに

王守寧字

王守寧字は清人投化して東都に寓居して後一医と以て藤堂侯に仕へ晩年は五柳子と号して其居を紫竹居と号して又長壽院と称す今世薬のツミと道三ツミと其子ツミと云ふ此人の権輿す所ありて宝永四年五月廿八日没して行年七十葬于三田

大乘寺

山縣大貳

山縣大貳名昌貞号柳莊子新論十三篇を著して其意を富の一時才と云ふ明和四年八月廿二日刑せらるる其巖を友人小泉養芳が著者於て四谷全徳寺に葬り法號貞英之良雄大禪定門

墓場二入り石子の墓石下に三墓あり前二

伊庭可丈

伊庭可丈の猪共ハハ猪の好む程史と著す天明二年六月三日没して行年三十七歳谷



大木戸理性寺に葬る。法号

玄如院粟山居士

葛唐丸

葛唐丸の姓喜多川氏本姓丸山氏石柯理  
孫重三郎其の家号を葛屋と稱し始新  
大川と申す間も任を後通曲所り書鋪とい  
川子と稱書堂と稱し行餘夷曲を好し  
都下の諸名士と周旋し寛政丁巳年三月  
卒年又行年四十八歳江戸山谷正法寺  
葬る友人石川立老との碑を入を  
撰り

三國筆海堂墓

三國筆海堂は常馬の産真木氏諱ハ正心云  
書を以て水戸侯も信し筆海堂書若子巻を  
著り其書

天覽より刺し三國筆海堂全書云延享  
二年十月廿四日設り谷中日性院に葬り法号  
朝宗院徳輝道哲居士と云

今其墓石を以て銘法大師八十八箇所の標  
石より其一面を刺し今三面文字あり  
其墓の形なり記



右三國某海學常陽路薩真幸正心墓

左

真幸幸正史正證 建之

祖曉禪師雪佛哥

甲斐祖曉禪師より雪をとりて雪佛法  
のうた釜の蓋の上におくれば秋一首と詠して

其徒よあめり

南無佛やこれの御衣佛毎上とる

あつたふあつたふ阿耨たらり

川邑瑞軒の出生

瑞軒翁ハ伊勢造拓より一里東及邑の春也  
今小川邑竹若のより多々吟士あり余勢遊の日

秋色櫻の辭

咫尺舟乗秋氣のよひに清おくれ秋は色  
ささゆの糸てよとのをさ乃に秋風香の息もきき  
ゆりゆりよよのひは若ぬ[秋色櫻の年]あや年  
上野の花らんもあやうらうらうと清け序令ささ  
よあこよひのれはゆりゆり山と清もあんさなゆり  
ゆりゆり秋色一漢百里と首なぬ葉あ  
ゆりゆり母かふあやうらうらう花はゆりゆり葉  
ゆりゆりそのへはせきさうらのよのひをさるあや  
西市川某歳市村加藤紅某ゆりゆりをゆり  
ゆりゆりゆり秋色うらひの根木枝子ゆりゆり



枝と折せりん〜 皇座のあまの山〜 あまの  
かたの〜 のあまの山〜 まいと殊ふ如の振舞  
あまの山〜 のあまの山〜 まいと殊ふ如の振舞  
さう〜 のあまの山〜 まいと殊ふ如の振舞  
秋の柱の〜 のあまの山〜 まいと殊ふ如の振舞  
黄水〜 のあまの山〜 まいと殊ふ如の振舞  
信之北〜 のあまの山〜 まいと殊ふ如の振舞

讀老菴日記終



右讀老日記 老摺軒所撰 老摺軒之右諸  
右象墓前一覽 藝之花遺香集等書  
近日借友人久留正義所藏以収于叢  
書

文政甲申歲仲秋

大草公明識



此續考卷日札之東都藝園北漢乃  
藏之本也昔文平出也毒時子配來之凡  
一借得之再借之也此道之傳信也  
器之入之也乃之也乃之也乃之也  
也之也乃之也乃之也乃之也乃之也  
乃之也乃之也乃之也乃之也乃之也

高木の  
好まむ  
續考卷之凡



5



